

〔嬉遊笑覽^十〕桂川地藏記^{弘治二年}賣買之物少々記之とある内に、坐禪納豆、法論味噌と見えたり、この坐禪納豆は濱名納豆の製なるべし、後に煮染の大豆を坐禪豆といふも、これより出たり、坐禪も小水の爲に、これを用ひしなり、むかしは茶食^{カワシ}にもせしものとみえて、醒睡笑に、見たところうまさうなれやこの茶の子名はから糸といふてくれなぬ、から糸とは納豆の異名なり、糸ひくをいふ、紅梅千句に、薪の能の棧舗とりく、^可納豆をさげ重箱に組入て、^正柚べしには唯手を掛もせぬ、^友安部泰邦卿東行話説^{寶曆十年}濱名納豆は見つきに似ぬ味にて、酒の肴にはえならぬものなり、今此邊にありやと尋ければ、本坂越の路三ヶ村の大福寺より出るものにて、此邊にはなしといふ、然れば濱名の産にもあらず云々、かさ、ぎのはしもとかけし橋杭も朽てはまなのなとふばかりぞ、^{濱名納豆は鼠糞の様に、か}とふばかりぞ、^{濱名納豆は鼠糞の様に、か}とふばかりぞ、^{濱名納豆は鼠糞の様に、か}

今この寺納豆も、法論みそ坐禪納豆の遺製、京師大徳寺真珠庵にて造るを、一休納豆と云、

〔人倫訓蒙圖彙^四〕扣納豆。薄ひらたく四角にこしらへ、細菜たうふを添うる也、ねやすく早業の物、九月末二月中うりに出る、富小路通四條上ル町、

〔大館常興日記〕天文十年十一月十五日、相州左馬助殿一兩日出京、今日下向也、仍唐納豆^{號池田唐納豆也}十給之、取次むこ千世也、

〔毛吹草^三〕山城 淨福寺納豆。遠江 濱名納豆。近江 觀音寺納豆^{汁ニ用之}

〔寛政武鑑〕井上武三郎正甫^{遠江濱松}時獻上^{中濱名納豆}

〔扶桑名處名物集^{遠江}〕名物

節分の茶には入すて大福寺皮山椒もまじる納豆

〔三省錄^{後編}〕^{飲食}本郷森川宿御先手組屋敷に、内山氏といへる同心あり、其先祖は北條家旗下の士にて、氏政よりの下知狀數通を藏せり、其中に内山氏出陣の節、ある桑門より見舞の書狀あり、一

正雄